



〈平成から温かいバトンを〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

ついこの間まで経済大国と呼ばれていた日本で、「子どもの六人に一人が貧困状態にある」と言われている。先進国の中では突出して目立つ恥ずかしい現実である（恥ずかしいといえば、日本の女性国會議員の割合は世界で最下位に近い一六五位だ、という列強国会同盟の報告書が今年の国際女性デーに発表された！）。貧困から三度の食事に事欠く子どもたちに食事を提供するのが「こども食堂」である。

「こども食堂」は、いま全国に二、二八六カ所ある（二〇一八年三月末）こども食堂安心・安全向上委員会調べ）。最初は、東京・大田区の青果店の女性店主が、地元の小学校教師から「バナナ一本で朝晩の食事に行っている子がいる」と聞き、自分ができることとして個人的に始めたのがきっかけだったとか。その後も増え続けているという。

この映画は「こども食堂について」の

映画ではなく、「こども食堂が必要とされる今の日本社会」のありようを、子どもの視点に寄り添って描いている。題名がひらがなだからといって、子ども映画ではない。はつきりと大人に向けて問いかけている。

東京・下町の小学五年生のユウト（藤本）は幼馴染のタカシといつも一緒。無口なタカシは学校ではいじめられてばかりだが、ユウトは特にかばうこともなく知らんぷり。巻き込まれたくないのだ。でも、学校の帰りはいつも一緒に「食堂「あづま家」をやっているユウトの家で夕食を共にする。タカシは育児放棄気味の母とふたり暮らしで、見かねたユウトの両親（吉岡、常盤）がそうしているのだ。ある日、学校帰りにふたりは鉄橋の下の河原に止めた小型車で父親と暮らす幼い姉妹に出会う。父親は不在がちで、空腹を訴える妹ヒカリのために、姉ミチル（鈴木）はコンビで

万引きをして捕まる。ユウトはそれを目撃、ミチルのことが気にかかってたまらなくなる。給食のパンや夕食のハンバーグなどをこっそり車に運んで渡したり、母親（常盤）に頼んで家で一緒に夕食をとったり、これまでの傍観者から積極的

に姉妹に関心を寄せ、行動し始める。
ある日、ユウトとミチルは妹たち、タカシも加えて子ども五人で、こっそり車で南伊豆の旅へ。そこにはミチル姉妹が以前両親と一緒に行った海の見える丘があり、家族で美しい「虹の雲」を見た思い出の場所。そこへ行けばまたパパとママに会える、と姉妹は信じていたのだが。だが、戻ってみれば、河原の車は無惨にも破壊され、姉妹には施設から迎えの車が。

遠ざかる車を追って、ユウトは走る、どこまでも、どこまでも。車の中でヒカリが見た虹の雲は、息絶え絶えのユウトの目にも見えたのか？

社会のひずみをもろに受けながら、何とか生きてゆこうとけなげに頑張る子どもたちの姿をカメラは丁寧に追う。優しい大人の差し伸べる手の温かさが救いだ。ファンタジーのような美しい画面の中には、日本の抱える重い課題がいっぱい。平成から次の時代へ、子どもたちに温かいバトンを渡したい。

『こどもしよくどう』

日本映画 (93分)

監督：日向寺太郎

出演：藤本哉汰、鈴木梨央、常盤貴子、吉岡秀隆ほか

公開中

©2018 「こどもしよくどう」製作委員会

